



R - 3



別島への冒険

芳田尚哉

【やっぱりいつもの朝】

.....。

.....。

.....。

俺は心地よい闇の中にいた。どこまでいっても闇だけど、とっても心地いい。ずっとここにいたいくらいだ.....。

「.....ゃん」

.....ん？ なんだか、揺れるな.....。

「.....ちゃん」

ああ、だんだんと闇が薄れていく。

「.....お兄ちゃん」

.....誰の声だ？ 誰かが呼んでいるような気がする。っていうか、こんな事、前にもあったような気がする。

「お兄ちゃん、起きてよ」

.....ん？この声は.....？

「.....っていうか、起きろっ！」

声色が変わった。.....ヤバッ！

俺は慌てて飛び起きた。

「あっ、起きた」

と、残念そうな声がした。

俺の目の前には分厚い百科事典がある。

「お前は、どうしてこうも毎朝毎朝俺を殺そうとするんだ」

俺は百科事典を構えている妹に言った。

「だから、いつも言ってるけど、だったら自分でちゃんと起きなさいよ」

それができたら苦労はしない。つうか.....。

「なあ、今日から夏休みだろ？」

「なに言ってんの。今日からレイファさんの別島に行くんでしょーが！」

別島.....ああ、そういやそんな事が.....。

「ほら、早く行かないと乗り遅れちゃうよ」

「そうだな。で、今何時だ？」

「八時。忘れているかも知れないけど、集合は八時だよ」

.....そうか、八時か。.....って、

「おい、やばいじゃんか」

「って言ったらどうする？ 今は七時だよん」

歩、なかなかやるな。

〈次回予告〉

というわけで、不動和己です。皆さん、お久しぶりです。なんだか、前回と同じ様な始まりですが気にしないで下さい。では、渡された原稿を……。

荒れ狂う海。まるで我々を拒むかのような大海原。そんな危機に救世主が駆けつける。そう、彼は時空の騎士！

次回、【救世主降臨！】

なお、これは次回の内容とは一切関係ありません。

……って、意味ないじゃん！

――ビリッ！

【それは先日の事である】

夏休み直前の事だった。

「夏休み、なにか予定はありますか？」

唐突にレイファが声を掛けてきた。

あの事件以来、俺とレイファの距離は縮まった。今までは同じクラスってだけだったが、最近ではお互いの家を行き来するまでになった……って、えらく発展したな、俺等の仲。まあ、俺は歩とセットなわけだから、恋人とかそんなものじゃない。親しい友人ってとこだな。

「夏休みか……特に予定はないが、どうしたんだ？」

「いえ、毎年夏は別島で過ごしますので、ご一緒にどうかと思ひまして」

「べっとう？」

「はい。自宅とは別にある家を別荘と申しますが、わたくしの場合はそれが島全体になりますので、別島と呼んでいるのです。日本語として間違っていないと思ひますが？」

……すごい。さすがだ。紫藤家恐るべし。

「なるほど、それはわかった。そうだな、歩にも訊いてみて決めようか」

「ああ、歩さんなら行くそうですわ」

……歩、なんだか妙にレイファに懐いているような気がするが……ま、いっか。

「そうか。じゃあ、俺も行こうか」

「わかりましたわ」

別島か……なんだか、夢のような話だな。ホント、俺みたいな一般庶民が経験できるものじゃないよな。完全に別世界の人間だ。まあ、俺はその別世界を体験しているわけだが。人生って不思議だな。どこでどうなるかわからない。

「では、夏休み初日の八時、港に集合でよろしいですわね」

「ああ、わかった」

「では、その日を楽しみにしておりますわ」

そう言って、レイファは自分の席に戻っていった。

こうして、俺の別島行きが決まった。

〈次回予告〉

昨日は散々な予告だったわけですけど、今日は大丈夫なのか……？ まあ、とりあえず原稿を……。

急遽決まった旅行。そこで待ち受けるのは一夏の恋。そう、あばんちゅーる！

次回、【僕はあなたにふぉーりんラヴ】

乞うご期待。なお、この内容及びタイトルは嘘です。

ダメじゃん。

――ビリッ！

【港にて……】

港へ向かう。

いつもの朝にホッと安堵するが、やっぱり命の危機を感じてゾツとしてしまう。

だけど、あれがないと朝って感じがしないしな……って、馴染んでどうする、俺。ちょっと、Mっ気があるのか？ ……いや、ノーマルだと信じたい。おっと、別にそういう人がノーマルじゃないと云うわけでもないが……って思っておかないと、蔑視になっちゃうからな。

とかなんとかしているうちに港に到着した。しかし、どこに……なんて考えるまでもなかった

。

港には、いかにもという船が停泊していた。

白亜のクルーザーがそこにはあった。もちろん、そんじょそこいらのクルーザーじゃない。ちょっとした客船くらいはあるであろう大きさだ。

なにも知らずに通り掛ければすごいなと思うだけだろうが、レイファ関連だと考えると、これくらい当然だなと思ってしまう。まあ、ヤツの家を知っているからだろうが。

「すごいね、お兄ちゃん」

隣で歩が感嘆の声を洩らす。

「ああ、すごい。さすがレイファだ」

ホント、すごすぎだな。日本にこれくらいの財力を持った人間がいるものなのか。

「ようこそですわ」

そう言って、歩み寄ってくるのはレイファだ。

「ご招待ありがとうございます、レイファさん」

「いえいえ、こんな小さな船で申し訳ないですわ」

「いいえ、充分すぎるくらい大きいですよ」

「ホントだ。こんなの、さすが紫藤家だな。日本一じゃないのか？」

「それでもありませんわ。日本には、わたくしども紫藤家に匹敵するグループがありますわよ」

〈次回予告〉

三度目の正直なるか……では、早速原稿を……。

世界最強に思われる紫藤家。しかし、ライバルは存在した。そう、それこそ……。

次回、【財閥戦争勃発】

今回はまともっぽいな。ん？ なになに？

『タイトルは嘘です』

――ブリッ！

【紫藤家VS神崎家】

レイファの口から意外な言葉が飛び出した。紫藤家に匹敵するグループがあるってか？

「そんなの、あったっけ？」

「ありますわよ。神崎グループですわ」

そういえば、そんなのもあったな。なるほど、あそこなら対等に渡り合えそうだな。

「しかも、神崎グループの会長は、若干十五歳の女の子なのですから、わたくしどもとすれば脅威ですわ」

「じゅ、じゅうご？」

俺は驚きを隠せなかった。まあ、神崎グループの名前は聞いた事くらいはあるが、そんな事までは知らなかった。っていうか、普通なら知らないと思う。

「そういえばそうでしたね。この前……といっても去年でしたっけ。ニュースでやってましたよね」

なに？ 俺は知らないぞ……っていうか、ニュースなんてただ流しているだけで覚えてなんかいない。

「そうですわ。あの時は、事前に挨拶されていたのですが、ビックリしましたわ。前会長であり現会長の父上でした神崎禎昭様の体調が芳しくないのはお聞きしていたのですが、まさか永眠されるとは……よきライバルだったわたくしのお父様はそのあと茫然自失状態になりまして、しばらくは大変でしたわ。今では、その娘であります、神崎璃織魚様とは神崎禎昭様と接していた時と同じように、対等の立場として一人の経営者として接していらっしゃいます。ホント、色々あるのですわ」

なんだか、そういう人たちはそういう人たちで大変なんだな。まあ、俺には縁のない話だけどな。別世界だな。

「では、そろそろ時間ですし、乗船しましょうか」

「そうですね」

こうして、俺たちは船に乗り込んだ。

〈次回予告〉

まったく、そろそろちゃんとしたもの読みたいな……じゃあ、原稿。

ついに乗船を果たす不動兄妹。しかし、そんな二人を過酷な試練が待ち構えていた。大西洋に沈む豪華客船。まさに、その運命を辿ろうとしているかのようだった。

次回、【へさき舳先でラヴポーズ】

全くの嘘予告です。

――ビリッ！

【豪華クルーザーその名は……】

「ようこそ、3代目クイーン・セレニティへ」

乗船すると、まずレイファがそう言った。へえ〜、この船そんな名前なんだ。3代目クイーン・セレニティね……って、3代目？

「なあ、3代目って事は、初代と2代目があったんだよな？」

「ありませんわよ」

即答。と、今度は歩が訊く。

「じゃあ、どうして3代目なんですか？」

「それはですね、初代はあの有名なキャラでしょう？ それに、とある人見知りの方が2代目クイーン・セレニティとおっしゃ仰ってますから、この船は3代目なのですわ」

そうなのか……って、なんでこいつはこんなマニアックな事を……初代って、あの月の国の女王様じゃなかったっけか？ 2代目の人見知りの人って、あの……散歩する萌えの人か？ そうだよな。やっぱり、レイファは侮れない。要注意だ。

「ですから、例の豪華客船のように沈没したわけではありませんわ。ご安心下さい」

よかった……。でも、普通3代目とか言われたら、それを考えてしまうもんな。

「では、出航のお時間ですわね」

時計を見る。八時だ。

時間ピッタリに、船は出航した。

「ところでさ、俺たちがこれから行くレイファの別島って、なんて名前の島なんだ？」

まあ、島の名前なんてどうでもいいのかもしれないが、やっぱり訊いておきたい。変な名前の島ならイヤだしな。幽霊島とか……さ。

「島の名前ですか？ これから向かう島はしどうしま紫藤島ですわ。わたくしどもの所有物ですから、そういう名前です。ですが、わたくしはレイファ・アイランドと呼んでいますわ」

違う意味でイヤな名前かもしれん。お嬢の考える事は所詮しがたい一般ピープルの俺にはわからんという事か……。

「素敵ですね」

しかし、歩は普通に感動していた。

〈次回予告〉

どうなってんだよ。これじゃ、予告になってないじゃんかよ。まあ、とにかく原稿ね……。

次回、【嵐を呼ぶ男推参】（嘘）

……って、文章無しかよ。しかも（嘘）って……。

――ビリッ！

【意外な同乗者】

「そうですよね。レイファ・アイランドについて説明しておいた方がよろしいでしょうね。では、ミッションルームへ行きましょうか」

ミッションルームね……すごいな、この船。そういや、さっきからやけに物々しい船が併走しているような気がするが……まあ、それはおいおいだろう。

とにかく、今はミッションルームへ向かおう。

「では、あの方にも一緒に説明しましょうか」

そう言って、客室に連れてこられた。俺たち以外にも誰かいるのか？

——トントン！

「ふあ〜い」

眠そうな声。しかも、どこかで聞いた事があるような、ないような……。

——ガチャリ！

ドアが開く。

……お前はっ！

「渡瀬！ どうしてお前がここにいるんだ」

「おう、不動じゃんか。今回は俺も一緒に行かせてもらうぜ」

「お前は、ちょいキャラだったはずでは……」

「いやな、本当なら櫻井がここにいるはずなんだろうが、ヤツは前回に失態を犯してしまった。故に、ヤツは見捨てられた。よって、空いたポジションにこの俺が入ったというわけだ。それに、名前が与えられたという事は、レギュラーキャラ候補という事。という事だから、この渡瀬章一郎はレギュラーの座を得たというわけなのだ」

「説得力のある解説ありがとうな」

「レギュラーおめでとうございます」

歩、それ以上ヤツを持ち上げる必要はないぞ。調子に乗るだけだ。天狗にならせてはいかん。そう、ヤツのためにならん。

「では、ミッションルームへ行きましょう」

俺たち四人はミッションルームへ向かった。

〈次回予告〉

今回は文章あるんだらうな。無かったらもう辞めるぞ。原稿はっつと……お、ちゃんと書いてある。えっと……。

ついにメンバーは揃った。目指せ、一繋がりの財宝！ 探すのだ、失われた青を！ そう、彼らの大冒険は今まさに始まった。この先は未知の海域。海図もない冒険に今その第一歩を踏み出した。

次回、【偉大なる航海】

なお、この予告は本編とは一切関係ありません。

またかよ。

――ビリッ！

【レイファ・アイランドについて】

「さて、レイファ・アイランドですが、この島は周囲が四kmの小さな島です。しかし、この島の生態系をできるだけ破壊しないよう、というよりも、自然を保護するため開発はあまりされておりません。ほぼ、自然のままです。ただ、危険防止のため、陸上の動物昆虫の類は排除させていただきました。それと、生活のため家を建てさせていただきました。さらに、緊急時の為に、ヘリポートを設置してあります。それ以外は自然のままです。レジャー施設などは造っておりませんので、ご了承願います。ちなみに、島は大きく分けて二つの地区に分類されます。これから我々は生活エリアの方に向かいます。生活エリアは家などがある方なのはわかりかと思えます。こちらには砂浜があり、自然の中で遊ぶ事が可能です。そしてもう一つは野生エリアです。こちらは、自然が手つかずのまま残されており、故に、なにがあるかわかりません。しかも、こちら側は断崖絶壁になっておりますので、接岸が不可能です。当然ながら危険なので近付かないようにしてください。ある意味、自殺するにはもってこいのポイントです。ここで殺せば、死体も上がらず、完全犯罪も可能かと思われま。注意しておきますが、そんな犯罪をこの島で起こさないで下さいね。これが、だいたいの説明ですが、補足として、疑問に思われているかもしれませんので追加説明としまして、現在この3代目クイーン・セレニティと併走している船についても説明しておきます。あれは、我が紫藤家が保有するイージス艦です。海上自衛隊が保有している〈DDG護衛艦"KONGO"Class「こんごう」型〉とほぼ同じ装備を有しております。その名の通り、この船の盾となるべき船です。本来ならば海中や空からの護衛もあるのですが、今回は皆様との楽しい旅行という事でやめさせていただきました。さて、以上がだいたいの説明ですが、他になにか質問などはございませんか？」

〈次回予告〉

なんだか、これっていらんんじゃないのか？ そう思えてきたぞ。とにかく原稿だな……。

緊急入電。それが一行の運命を一転させた。リゾートに向かうはずだった一行。しかし、突然に起こったテロ。これはピンチだ。さあ、みんなで呼ぼうあの名を。来てくれ、時空の騎士！

次回、【時空の騎士再降臨！】

……まあ、どうせ嘘なんだろうな。

――ブリッ！

【紫藤家は海自に匹敵？】

質問って言われてもな……すごすぎて、なにも言えないだろ、これじゃ。

他の二人も、ポカンと口を開けて、どうするものか考えてるし。まあ、渡瀬はともかくとして、歩までこうなっちまってるんだから、相当な衝撃だったんだろう。

だいたい、なんで個人でイージス艦なんて所有してるんだ？ 海上自衛隊でも四隻しかないんじゃないのか？

イージス艦〈「こんごう」型〉というのは、現在四隻存在する。『こんごう』『きりしま』『みょうこう』『ちょうかい』である。ちなみに、イージスとはギリシア語で盾という意味だ。

その装備は、世界第一位とも云われている。

イージス装置一式、VLS装置一式、高性能20ミリ機関砲×2、SSM装置一式、54口径127ミリ速射砲、3連装短魚雷発射管×2、電波探知妨害装置一式、対潜情報処理装置一式（Japan Maritime Self-Defense Force 海上自衛隊HP [<http://www.jda.go.jp/JMSDF/>] 参照) ……と、よくはわからんが、とにかくすごい装備なのだそう。

その海上自衛隊でさえ四隻しかない護衛艦を所有しているのだから、紫藤家というのは恐ろしいものだ。

っていうか、維持だけでも大変じゃないのか？ だから、他の国だってほとんど所有してないか、もしくは常に起動できるような状態じゃないとか……そんな話を聞いた事があるぞ。

「なあ、そのイージス艦は普段はどうしてるんだ？」

「あら、どうやらあなたはイージス艦について多少の知識があるようですわね。このイージス艦エンディミオンIII世は、要請があれば緊急時に限ってですが、海自にお貸ししたりもしております。まあ、ケース・バイ・ケースで、訓練にも使用しておりますし、わたくしどもから護衛訓練のためにもお願いしたりもしております」

〈次回予告〉

なんか、もう疲れた……。じゃあ、原稿。

眠れるアジアの獅子とまで云われる日本。その軍事力は完全発揮されれば世界一とも云われる。そして、その軍事力の数分の一の戦力を個人で保有する紫藤家。それはまさに最強である。

次回、【世界の犠牲者に追悼を……】

って、こんな話じゃないだろ、絶対。

――ブリッ！

【不動和己、熱く語る】

「悪い。よくわからんのだが、わかってるなら説明してくれないか」

渡瀬が俺を見て言う。

「なにをだ？」

「全部よ、お兄ちゃん」

「どうやら、歩もなんの事やらわかっていなかったようだな。」

「なにから説明すればいい」

「そういう時は、最初から話して終わりが来ればやめればいいの……って、昔、有名な人気ドラマでなかったっけ？」

「いや、あったと思うが、勝手に引用していいのか？　すみません。俺から謝ります。」

「わかったよ。じゃあ、とにかくイージス艦ってわかるか？」

「わからん」

「わかるわけないじゃん、あたしたちに。ってというか、普通の一般ピープルは知らないわよ。知っているのは、そういうミリタリーマニアくらいじゃないの？」

「……まあ、普段の生活でイージス艦ってのは出てこないわな。かくいう俺もそんなに詳しくない。ちょっとかじっただけだ。だから間違った知識もあるかもしれないが……まあ、いっか……って、本当はよくないんだろうけどな。」

「えっと、イージス艦ってのは、護衛艦だ。艦隊の盾となるものだ。イージスってのも、ギリシア語で盾って意味だしな」

「なんでギリシア語なの？」

「知らんわ。いいだろ、んなこた事あ。で、このイージス艦ってのは、攻撃なんかを事前に探知して装備しているミサイルなんかでそれらを破壊。艦隊を護るのが役目なんだ。そう、一隻じゃなくて、艦隊を護るんだ。かなり広い範囲を護る最高の防御艦であり攻撃艦とも云えるだろう。故に、そんなイージス艦一隻でも相当範囲を護れるのだ。それが、この3代目クイーン・セレニティを護衛しているんだぞ。すごいとしか言いようがないだろ？」

〈次回予告〉

いい加減ちゃんとした予告がしたいな……。さて、原稿っと。

大海原を平和に航行する一行。しかし、そんな一向にみぞう未曾有の危機が迫っていた。それは、かの有名な生きた化石と呼ばれる生物の襲来であった。

もう少し先、【大パニック！　生きた化石の襲来】

って、次回じゃないんか！

――ビリッ！

「とにかく、すごいんだな？」

「ったりめーだ。このイージス艦は日本とアメリカしか保有していないらしい。まあ、少なくとも俺が読んだ本にはそう書いてあった」

「そうなんだ……すごいじゃない、レイファさんって」

感心するのが遅いな、歩。まあ、前知識がなければ無理もないか。

「ホント、すごいとは思ってたけど、そんなにすごいとは……なあ、あの噂を本当にしてさ、俺の人生設計を実現させてくれよ」

あの噂……？ ああ、俺とレイファがマリッジ云々か。あんなの、誰が言い出したんだか。まあ、このテの噂ってのは、ちょっと親しくしただけで流れそうなものだしな。ましてや、相手が相手だけに信憑性があるわな。

「残念だが、俺はお前の人生設計の犠牲になるつもりはない」

「犠牲とはなんだ。お前だって利益はあるだろうが。逆玉だぞ、逆玉。こんなおいしい話はないだろうが」

「だから、どうして本人の意思を無視してお前の利益のためにそうしなきゃならんのかと訊いている」

「じゃあ、レイファがOKすればいいのか？」

「そういう問題でもない」

「お前、レイファのどこが不満なんだ？俺が言うのもなんだが、レイファって結構いいと思うぞ。そりゃ、住む世界が違うが、そんなのしょうがい障碍にもならん。まあ、お前たち兄妹はよく紫藤家に行っているようだし、言ってしまうえば公認の仲ってヤツなんじゃないのか？少なくとも、俺はそう思っているぞ。お前とレイファはあんなでこんなで……そんな関係なんだと」

「意味深な発言はやめろ。お花畑に招待されるぞ」

「それは困る。で、真相は？ 3、2、1、キュー！」

〈次回予告〉

いきなりですが、俺の次回予告は今回で終わりみたいです。結局、一回もまともな予告をしていないような気がするな……。まあ、最後の原稿を読みます。

問い詰める渡瀬章一郎。問い詰められる不動和己。渡瀬の真剣な表情に改めて己を見つめ直す和己。そして、彼は自分の想いに気付く。

次回、【我が心の女神様へ】

って、まともそうだけど、そんな展開なのか？ ……ん？ もう一枚原稿が……えっと。

やっぱ、イヤ？

イヤに決まってるだろーが。

って、こんな予告でよかったのか？ えっと……カンペが……なにになに……。

人気があれば再登場できるかも。全ては読者の意見によって決まります。

.....なんちゃそりゃ。

【禁断のボケと禁断の展開】

「ジュウ」

.....やっちゃった。

つい反射的に.....ああ～後悔先に立たずだな。やっちゃいけない、禁断のボケやった.....って、なんで大阪弁になってるんや？ まあ、ええか.....って、よーないっちゅうねん。

「お兄ちゃん、最低だね」

「ボケるのはいいんだが、それはないだろ」

二人から冷たいツッコミが.....。

「わたくしも、それはどうかと思いますわ」

レイファもか.....。

「悪い」

認めよう。認めざるを得ない。

俺はタブーなボケをやっちゃいました。ああ、やっちゃいましたノートに書こうか.....不動和己、禁断のボケって。

「ところで、その噂ってなんですか？」

話を戻すレイファ。

「ああ、それはな、こいつとレイファが結婚するって.....」

「ああ、それですか」

.....ん？ 意外な反応。

「本当ですわよ」

「「「.....」」」

俺たちは絶句する。

「「「.....」」」

喋れない。

「「「.....」」」

沈黙。

「嘘ですわー」

.....緩和。

「ー今のところは」

.....なに？ なんだ、その含みがある言い方は。

「じゃあ、この先もしかしたらあるわけか」

「そうですわね。お父様は結構気に入っているようですわ。ですから、もしかするとがあるかもしれせんわ」

あんですとーっ！

初耳（ういみみ）だ。

〈次回予告〉

さて、前回でリストラされました和己さんの代わりに、わたくし紫藤麗華が次回予告を担当する事になりました。

さて、原稿はこれを読めばいいんですね。では……。

ぱんぱかぱーん♪ ぱんぱかぱーん♪ ぱんぱかぱんぱかぱんぱかぱーん♪

次回、【ゴールイン！】

当然ながら嘘です。

って、なんですか、これ。

――ビリリッ！

【それぞれの思惑……そして、事件は起こった！ 急げ、会議室から現場へ！】

「お兄ちゃん、そんな事になってたんだ。って事は、あたしはレイファさんの義妹になるわけなんだ……クスリ。よし、これであたしも財閥関係者の仲間入りね。社交界デビューってヤツね」
歩、お前は……いや、なにも言うまい。

「レイファ、なんだその話は。俺は聞いてないぞ」

「当然ですわ。今、初めて言いましたから」

サラッとと言うな、サラッと。あっさりとしたそんな重大な事を……。

「レイファ、ヤツの友人として一生友達でいてくれ。というか、マイライフの実現のために……」

「お前はじゃかーしー！」

ったく、こいつはこいつでしつこい。

「レイファ、とにかくこいつは無視してくれ。で、その話は本当か？」

「もちろんですわ。まあ、わたくしもあなたなら問題ないですし」

「……………」

……告白？ そうなるのか？

「よかったね、お兄ちゃん。そして、あたし」

どいつもこいつも。自分の利益になる事は嬉々として……ライオンのようなヤツらだな……。
って、俺はレイファと……ああ、わけわからんっ！

「とにかく、俺は……」

イヤだ……なんて言えないわな。

「俺は……なんですか？」

「なんなの、お兄ちゃん」

「なんなんだ、おい」

……俺を見るなよ。

そんなに見つめられると照れちゃうじゃないか……って、そんなボケ、やっぱりタブーだろうな。

もう、どう答えれば……。

「俺はだな……」

その時だった。

「キャーッ！」

〈次回予告〉

ホント、和己さんもこんなのを読んでいたんですの？ これは、問題ありじゃないんですの？
ホントに、こんなのでいいんですの？

まあ、依頼されましたのであまり言いたくないですけど。……とにかく、原稿ですわね。

大海原を平和に航行する一行。しかし、そんな一向に未曾有の危機が迫っていた。船内に悲鳴が木霊する。それは、かの有名な生きた化石と呼ばれる生物の襲来であった。

次回、【大パニック！ 生きた化石の襲来】

かみんぐすうん。

ってこれ、前にも同じ予告なかったですか？ えっと……カンペが。

一文を追加しました。ちなみに、初の本当の予告です。

それならいいですわ。

【大パニック！ 生きた化石の襲来】

「なんだ？」

突然の悲鳴に俺たちは顔を見合わせた。

「なにがあったの？」

「急ごう。会議室ではなにもわからない。現場に急ぐんだ」

.....事件は会議室で起こって.....って、ここはミッションルームだったな。じゃあ会議室か。いいんだ。

まあ、そんな事はともかく急ごう。

俺たちは悲鳴がした方に走った。

みんなで全力疾走か.....疲れるな。

それにしても広いな、この船。3代目クイーン・セレニティ恐るべし。

はあ、はあ、はあ.....って、なんとか悲鳴がした部屋に.....って、厨房じゃん。

そこで、一人の女性が腰を抜かしている。

「どうしたのですか？」

レイファがその女性に言う。

「お嬢様.....あ、あの.....ゴ、ゴキ.....」

「そこの方、それ以上は言ってはいけません。普段ならともかく、ここは厨房。それは禁句ではないでしょうか。そう、この場合はナルミタカ.....んぐっ」

慌てて口を塞ぐ。

「渡瀬、これ以上は著作権云々じゃないか？」

「わ、わかった。もう言わないから」

ったく、まずい言葉は禁止だ。陳謝です。

「では、なにか別の言い方を.....そうだな.....」

考え込む渡瀬。

「ねえ、こんなのどうかな？」

歩が発言する。

「生きた化石」

.....一瞬、場が静まる。

「さすがだ、不動妹。それに決定だ」

「そうですわね。それでいいのではないのでしょうか」

「ああ、そうだな。それがいいな」

みんなが同意した。ナイスだ、歩。お前が妹で俺は誇らしい。って、こんなんですか？

〈次回予告〉

本当に昨日の予告は本物でしたのね。これからもそうすればいいでしょうに。どうして、嘘予

告ばかりなんでしょうね。……とにかく、原稿ですわね。

ついに敵は現れた。船内を恐怖に陥れる生きた化石。この状況を打破できるのはヤツしかない。さあ、呼ぶのだ雄々しきその名を！

次回、【時空の騎士再々降臨！】

テックセツ……。

これ以上はダメですわ。

――ビリリッ！

【召還！ 駆除隊よここに！】

「というわけで、生きた化石さん、いらっしやい……とお迎えするわけだな。そして、生きた化石さんお帰りです……と言うわけだな、うん」

渡瀬、そんなコアな全国で三万人ほどしかわからないネタはいい。いや、もっといるか。

「不動」

「なんだ」

「その顔はわかったって顔だな」

「ああ、だがそれはごくわずかな人たちだけだ」

「それでも構わん。わかる人だけクスリ……それでいいじゃないか」

「好きにしろ」

……まったく、話が逸れた。っていうか、なんの話だっけ？ ……………ああ、まだなにも始まってないな。強いて言えば、ヤツの呼び名が生きた化石に決まったんだっけか。

「新見、その生きた化石はどこへ行ったんですの？」

レイファが腰を抜かしている女性に言う。ふうん……この人、新見さんっていうんだ。

「は、はい。ゴキ……いえ、生きた化石はあっちへ……」

と、冷蔵庫がある方を指す。つまり、一番奥だ。

「あそこですね。では、駆除隊を召還しましょう」

駆除隊……？ 召還……？

「ちょっと待て、レイファ。なんだ、その駆除隊ってのは」

「その名の通りですわ。この船を隅から隅まで殺虫剤で……」

「やめろ」

「どうしてですか？」

「俺たちはどうなるんだ」

「避難するに決まってるではないですか」

「そんなに大袈裟にする事ないだろう。俺たちだけでもなんとかできるさ。俺たちでなんとかしよう」

〈次回予告〉

もう……時空の騎士ってなんですか？ わたくし、自分で読んでいてなんの事かさっぱりですわ。まあ、原稿はちゃんと読みますけど。

記憶を無くした少女。彼女は自分に関する全てを忘れていた。そんな少女をある少年が助けた事から物語が始まった。

次回、【彼女は名無し——喋る黒猫のぬいぐるみと焼きもろこし好きの死神～切なく悲しい淡くて儚い恋の物語】

著作権、大丈夫ですか？ 証拠は抹消ですわね。

――ビリリッ！

【パーティ結成！ 目指せ魔王の城】

「でも、どうやって対峙するの？」

対峙と退治……とにかく、誤植ではないな。これであってる。

「ああ、それだが、オーソドックスに新聞紙とかスリッパで武装して対峙しようと思っている。そして、生きた化石を退治するんだ」

どうよ、この作戦……ってか、作戦じゃないし。

「だが、よく考えれば殺す事もないんじゃないか」

冷静な発言をする渡瀬。確かにそうなんだ。わざわざ殺す事もないんだよな……まあ、気分的に優れない事はたしかだが。

「ダメですわ。わたくしは完璧でないといけません。ですから、厨房に生きた化石がいたなどと、そんな事あってはいけませんわ」

説得力のある言葉だな。

「わかった。この船はレイファのものだ。だから、俺はレイファに従う。というわけで、勇者レイファ様、この剣士渡瀬章一郎はあなたに従います」

……渡瀬、お前はいったい……。

「じゃあ、あたしは魔法使いね」

……歩までかよ。

「歩、お前はどちらかと云えば女武闘家って感じだ」

「お兄ちゃん、お花畑への片道切符いる？」

「わ、悪かった……赦して」

「それでよし。さっすが、村人ね……って、これじゃ名探偵のパクリになるから、盗賊くらいにしといてあげる。さっすが歩ちゃん。やっさしーい！」

「もう、好きにしてくれ」

「では、新見は司祭という事で」

「は、はあ……」

さすがの新見さんも、この展開にはついていけないようだな。よかった、普通の人で。

「では、いざっ！ 倒すは黒き魔王、生きた化石！」

……いいのか、こんな展開。

〈次回予告〉

さて、そろそろわたくしもこの次回予告に慣れてきましたわ。要は、あまり気にしなければいいのですわ。サラリと流せばいいだけなのですわ。というわけで、早速原稿ですわ。

彼女は死を運ぶ者。彼女は死を告げる者。大切な人が死んでしまう。なのに……自分はなににもできない。無力……。ただ、見ているしかできない。ああ、力があれば……力が欲しい。力が……。

次回、【止められない衝動。止まらない鼓動——あなたがいなくなにも始まらないから～大好きなあなたへ……届け、この想い、この胸の高鳴り……全てはあなたの笑顔のためだけに……あなたに全てを～】

長すぎですわ、このタイトル。

——ビリリッ！

【武装完了！】

「なんだかよくわからないまま、俺たちは装備を済ませた……って、装備ってなんだよ」

「お兄ちゃん、モノログってないで、さっさと行くよ」

モップを手にした歩が言う。魔法使いという事でモップを持っているというわけだ。本当なら箒の方がいいのだろうが、箒よりモップの方が長くて魔王に近付かなくていいから……というわけらしい。同じ様なものだと思うのだが……。って、箒とか云ってる段階で、それは魔法使いより魔女だろ、やっぱ……。いや、魔女でもいいのか？ でも、RPGにそれは似合わないな……。まあ、本人がいいんなら、それでいいだろう。

「不動、なにか言いたい事があるのはわかる。だが、今はそんな細かい事はどうでもいいだろう」

なんだかわからんが俺を諭す渡瀬。そんなこいつは丸めた新聞紙を持っている。まあ、剣士だし、これでいいか。最初は包丁を所望していたが、それはレイファに即答で却下された。まあ、当然だな。

そんなレイファは同じように丸めた新聞紙を持っている。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

そう言って、新見さんを見る。彼女は司祭という事で、武器を持っていない。手を胸の前で組んでいるだけだ。

でもって、盗賊である俺はというと……素手だ。

「なあ、なんで俺は素手なんだ？」

「やっぱ、武器が欲しいか？」

「当然だ」

「でも、盗賊はやっぱりあんまり武器はね……」

歩、その俺を虐めるような目はなんだ。

「仕方ないな……ほら、お兄ちゃん」

そう言って、歩がなにかを俺に放った。

「スリッパ……」

「それでいいでしょ」

〈次回予告〉

わたくしの担当もあと少しらしいですわ。最後まできちんと担当いたしますので、応援して下さいませ。では、原稿ですわ。

宇宙からの侵略。攻撃を受ける人類。しかし、人類も黙っているはずがない。人類は彼らのテクノロジーから新しい兵器を開発した。そして、彼らの本拠地へと向かう。

次回、【遙かなる宇宙へ——このメールはいつ届くのかな？】

ホント、大丈夫ですか？

――ビリリッ！

【盗賊＝使い捨て？】

なんだかわからぬままスリッパを手にした俺。悲しいな。どうしてこう、弄られ役なんだ？

どっちかつうと、渡瀬の役目じゃないのか、こういうのは。

「お兄ちゃん……じゃなかった、こら盗賊、ちゃんと闘いなさいよ」

とか言って俺を先頭にする。

「なあ、どうして盗賊が先頭なんだ？ 普通、勇者じゃないのか？ だって、勇者って勇気ある者だろ？」

「うるさいですわ。あなたは所詮は盗賊。わたくしたちの盾となるのが最大の役目ですわ」

「そうよ、お兄……盗賊。あたしたち正規のパーティが危機に曝されてどうするのよ。こういうのは、使い捨てである盗賊で充分なの。わかった？」

……すげえ理屈だ。しかも、正論に聞こえるっぽいし。ったく、やってられんな。

「そういうわけだ。諦めろ、盗賊」

「剣士までもかよ……」

仕方がない。納得は出来ないが仕方がない。

俺は生きた化石を探した。

「どうですか？ いました？」

フルフル……と首を振る。

「盗賊、嘘ぶっこいてあたしたちをビビらそうとか、そんなあくどい事考えてないでしょうね。もしそうなら、即刻でお花畑のお姉さんと感動の対面だからね」

「誰が、んな事考えるか」

ったく、すぐに見つかるはずがなかりょうに。だいたい、生きた化石はどこにでも侵入できるからな……。一度見逃すと、なかなか出てこないからな……。

「盗賊、早くしろ」

仕方がないな……最後の手段だ。

「歩、魔法だ。魔法を使え」

仕方がない、こいつらのRPGゴッコに付き合っただけやるとしよう。

「魔法？」

〈次回予告〉

なんだか、とんでもない方向に進んでいるようですが、作中に登場しているネタはどのくらいの方がわかっているのでしょうか？ ……と、そんな事はどうでもいいですわね。わたくしは、この原稿を読むのがお仕事ですから。

始まりの街を出発した一行。順風満帆に思えた旅立ち。しかし、それは嵐の前の静けさであった。

次回、【最後の口づけ――空、広いね……】

なんだか、だんだんと危険な香りがするのですが.....とにかく、証拠は抹消ですわね。
――ビリリッ！

【司祭の機転】

「そうだ、魔法だ」

「だから、魔法ってなによ」

.....鈍いやつだ。って、これだけでわかるヤツはそれはそれでイヤだが。

「だから、霧の魔法だ」

「キリ？」

歩は首を傾げる。レイファと渡瀬も理解できていない。そんな時、意外な人物が口を開いた。

「これですね」

司祭だった。その手には、俺が考えていたものである殺虫剤があった。

「え.....っ？」

俺は咄嗟に反応できなかった。全く予想していない場所からだったからだ。

「は、はい.....そうです」

そう言うのがやっとだった。

この人、なにげに侮れない。

「なあんだ、殺虫剤か.....なるほど、霧の魔法か.....わかんなかったよ」

「わたくしもですわ。新見、さすがですわね」

「ったく、もっとわかりやすい言い方しろよな.....」

他にどう言えと？

「それにしても、よくわかりましたね」

「そんな.....当然ですよ。これくらいわかりませんと、司祭なぞできませんから」

.....俺の希望は脆くも崩れ去った。この人だけは普通だと思っていたのに.....そう願っていたのに.....なのに.....。

この人は違う意味で普通じゃない。

って、まあこの世に普通って人ってなんなのかって事になるが.....そもそも、普通ってなんなのか、それが最大の問題なのだ。

人は誰も違って当然なのだ。なのに、同じにしようとする事が間違っているのだ。違って当然なのに.....。違うからこそいいのに.....って、なにを語っているんだか、俺。

「とにかく、その殺虫剤で生きた化石を退治しよう」

〈次回予告〉

なんだかこの予告にも慣れてきましたわね。もう、どうでもいいですわ。とにかく原稿ですわ。

もってあと一週間でしょう.....そんな言葉を聞いた。もう助からないんだね.....そんな言葉を聞かされた。バイバイだね.....そんな言葉は聞きたくなかった。

次回、【これは秘密なの.....でも秘密はイヤだよ】

どうすればこういう予告になるんでしょうか？
――ビリリッ！

【小さな犠牲と大きな功績】

「盗賊、やるのです」

盗賊に命令する勇者って……まあ、いいけどさ。ああ、なんだかこの状況に馴染んできてしまっている。このままでは使役される事を喜ぶ人間になりそうで怖い。別に変でもなんでもないと思うが、俺個人としてはなりたくないものだ。

「生きた化石、覚悟！」

歩の掛け声を合図に、俺はスプレーを発射させた……って、俺がせっかく魔法って言ったんだから、魔法使いがすべきなんじゃないのか？ まあ、掛け声は魔法使いだったから……って、ダメだろ、やっぱ。

——シュウウウツ！

勢いよく生きた化石が逃げ込んだ場所に霧の魔法が炸裂する。

「ごほ、ごほっ」

しかし、すごすぎ。あまりの量に咳き込んでしまう。

他の連中も……と振り返ると、各々ハンカチなどで口許と鼻を覆っている。しかも、なんだこの距離は。お前ら、いつの間にそんなに離れたんだ……？

マジで卑怯なヤツらだ。本当に使い捨てかよ。

「どうですか？」

……ハンカチ越しのくぐもった声がする。

しかし、どうと訊かれても……なあ。

この状況だと、俺も霧の魔法の餌食だ……って、マジで意識が……ああ、霧の魔法を使う時は、用法をよく読んで……くたっ。

……………。

……………。

……………。

「……やん」

声が聞こえる。

「……ちゃん」

この声は……。

「……お兄ちゃん」

ああ……俺、生きてるんだ。

〈次回予告〉

なんだか、疲れてきましたわ。ですが、完璧なわたくしですから、休むわけにはいきませんわね。原稿を読みますわ。

ここは心の中の世界。闇に支配された者を救え！ その想いを言葉にして闘うのだ。その者の

心に直接届けるのだ。

次回、【失われし言葉をさがして】

もう、なんでもありですね。著作権侵害で訴えられそうですわね。わたくしから陳謝しておきます。申し訳ございません。……と、一応謝っておきますわ。そして、例の如く証拠は抹消させていただきます。

――ビリリッ！

【奇跡の目覚め】

「よかった……」

歩……心配してくれたのか……なんだかんだ言っても、やっぱり兄が心配なんだな……俺は嬉しいよ。

——ゴッ！

……鈍い音。痛い。額がモーレツに痛い。

「ゴメン、構えを解くの忘れてたよ……」

そう言って、目の前のモップをどける……つうか、こいつはなにかで殴らにゃ起こせないのか？ それとも、俺がそれほどまでにしぶといのか……なんにせよ、凶器で起こすのだけはやめてもらいたいものだ。命に関わる。

「よかったですわ。霧の魔法であなたまでその効果を受けたのかと……」

「いや、マジで死にかけた」

「お嬢様、レイファ・アイランドが見えてまいりました」

……そうなのか……っておい、俺の心配は？ 新見さんも、そんなにあっさりと言げなくとも……ちょっとは俺の心配をさ……。

しかし、誰も聞いちゃいない。薄情な連中だ。

「では、そろそろ準備をしませんといけませんわね」

「そうですね」

「おい、不動兄。お前もそんな所でお昼寝してないで、さっさと準備しろよ」

……キミタチハコノジョウキョウヲリカイデキナイノカネ？

いや、もうなにを言っても無駄だろう。こういうヤツらさ。わかっているのにな……どうしてこう、期待しちまうんだらうか。

でも、人ってさ、不安な時は誰かに頼りたくなるもんじゃない。誰かに心の支えになってもらってさ……辛い時は愚痴を聞いてくれるだけでいいからさ……そんなもんじゃない。そうだろ？

側にいてくれるだけでいいからさ……。だけど、こいつらは……。

そんな事を考えているうちに、船は目的地に到着した。

〈次回予告〉

わたくしの予告も最終回のようなのです。ちなみに、この話もこれが最終回のようなのです。

……？ では、どうして次回予告があるのでしょうか？

とにかく、原稿を渡されましたのでそれを読みたいと思います。

今回で『別島への冒険』は終了します。次回からは『別島での冒険』が始まります。

というわけで……『別島での冒険』第1話の予告です。

ついに到着した。様々な困難の末に到着した。困難の中で強めた絆。それが試される時が来た。全てはこの島の伝説に……。

ちゅぎのお話は？ 次回、第1話【ファースト・ステップ】

全てがここから生まれる。

なんだか、妙に仰々しいですわね。一部お馬鹿ですけど。

それに、わたくしがお役御免というのは、むかつきますわね……ですので最後も……。

――ビリリッ！

F i n o .

R - 3 別島への冒険

<http://p.booklog.jp/book/32411>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32411>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32411>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.